

フルーツで朝食を

2006(平成18)年8月19日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督＝ニール・ジョーダン／原作・脚本＝パトリック・マッケープ『フルーツで朝食を』／
出演＝キリアン・マーフィー／リーアム・ニーソン／エヴァ・バーシスル／ルース・マッ
ケープ／ルース・ネッガ／シーマス・ライリー／ローレンス・キンラン／ギャヴィン・フラ
イデー／ブレンダン・グリーソン／スティーヴン・レイ／イアン・ハート／スティーヴン・
ワディントン (エレファント・ピクチャー配給／2005年イギリス映画／127分)

……近時増えているオカマ映画の1つ(?)だが、『トランスアメリカ』ほ
どハードではなく、「フルーツ」＝冥王星のタイトルからもわかるとおり、
メルヘンチックな香りを漂わせた心温まる作品。テーマは主人公による母親
探しの旅とその中での自分探しの旅だが、物語の充実度は他に類をみないほ
どいっぱい。さて、そんな彼の旅が行きつく先は、幸せそれとも不幸せ……？

「オカマ映画」の傑作が次々と……？

「性同一性障害」(GID；Gender Identity Disorder、ジェンダー・アイデンティテ
ィ・ディサダー)をめぐる議論が全世界的に深刻になっていることを受けて
(?)、近時は「オカマ映画」(?)の傑作が次々と……。先日(7月12日)観た
『トランスアメリカ』(05年)がその傑作だったが、本作もその1つ。

両者とも男から女への転換を望むものである点は同じだが、『トランスアメリ
カ』が性転換手術を目指した本格的なもの(?)であるのに対し、本作はトラン
スセクシャル(Male to Female、身体的には男性であるが性自認が女性であるケ
ース)という少し緩やかな(?)レベルの問題。また、近時はやりの概念である
トランスジェンダー(TG)は、「社会的な性別を反対の性で生きる人々」を指す
もので、これは社会的な性の問題を重視したもの。そして、その問題の解決のた
めには教育的な助けを必要とするもの。したがって、この本作は、この「トラン
スジェンダー」という概念が最もピッタリする領域のオカマ映画……？

こまどりはうわさ好き……？

パトリック・ブレイデン（キリアン・マーフィー）が生まれた北アイルランドに隣接する小さな南部の町タイリーリンは、うわさ好きのこまどりが名物……？ いやいや、そんなわけではない……。

とらえようによってはメチャ重くなるパトリックの人生の物語を、かなりメルヘンチックに描いたニール・ジョーダン監督が、道化役あるいは舞台回し役として「起用」したのが、こまどりだったということ。

映画の冒頭に登場するのは、教区の司祭リーアム神父（リーアム・ニーソン）の家の玄関口だが、そこに毎朝配達される牛乳と今日一緒に「配達」されてきたのが、かごに入れられたかわいい赤ん坊。これが生まれた直後のパトリックなのだが、その母親はリーアム神父の家に出入りしていた若い家政婦のエイリー・バーギン（エヴァ・バーシッスル）。すると、この赤ん坊の父親はひょっとして……？

パトリックはおばさんの家で成長したが……

神父といえども男である以上、人並みの性的欲求があるのは当然だが、どうもこのリーアム神父は人並み以上にスケベそうであるうえ、精力も強そう……？ 聖職者といえどもその方面の欲求が強いのは、日本の僧侶も同じ……？ しかし、「産ませっぱなし」はいくら何でも無責任で、何らかの責任をとらなければ……？ 神父がこの家政婦をどのように言いくるめようとしたのかは知らないが、赤ん坊を神父の家の玄関前に置き、母親が姿をくらませてしまうことになったということは、結局その交渉が成立しなかった証拠。そこでやむなくリーアム神父は、隠すようにこの赤ん坊を近所のブレイデンおばさん（ルース・マッケープ）の養子としてその養育を任せてしまった。それから数年後、パトリックは一見順調に育ったかにみえたが、10歳になる頃には、キレイなものに憧れる自分に気づき、ついにある日、化粧をしたり、女装をするほどまでに……。

「戦争遊び」が常識……？

戦後61年間平和を享受してきた（平和ボケになっている？）日本の子供たちに

はありえないことだが、『トリスタンとイゾルデ』以来（?）、長い間イギリスと戦い続けてきたアイルランドにおいては、子供たちの遊びは何と戦争遊び……？

少年少女時代は誰でも皆、夢見る年頃だが、小さい時から実の母に憧れ、トランスジェンダーの芽を持っていることが明らかになった（?）パトリックは、人よりもその傾向が強かった様子……。そのため、テレビやマンガの影響を強く受けると同時に自分自身の想像の世界の中で生きていく傾向が強くなっていった。したがって、「類は友を呼ぶ」のことわざどおり、そんなパトリックの友達になるのもかなりヘンな奴ばかり……？

それが、アーティストを夢見る黒人少女チャーリー（ルース・ネッガ）、純真な心を持つダウン症の少年ローレンス（シーマス・ライリー）、そして戦争ごっこが誰よりも大好きな少年アーウィン（ローレンス・キンラン）たちだった。したがって、アーウィンの遊びは、アイルランドとイングランドとの間の戦争ごっこばかり……。コトの是非はともかく、こんな現実があるということは私たち日本人もきちんと理解しなければ……。したがって、大人になるにつれてチャーリーとアーウィンの2人は付き合い始めたものの、アーウィンは次第にIRA（対英テロ闘争の武装組織）の活動にのめり込み、革命、革命の毎日に……。

聖キトゥンとは……？

少年時代のパトリックはアーウィンのように戦争遊びは好きではなく、1人想像の世界に入るのが大好きな少年。また、その想像は美しいものばかりに広がっていくもので、おしゃれの技術や裁縫の腕前は急速に上達。そして、パトリックは自分の名前さえ少年の名前のパトリックではなく、美しく中性的な聖キトゥンだと思えるようになっていった。したがって、自分が女性になって話す時はいつも聖キトゥンとなったが、これって一種の精神分裂であり、二重人格ってこと……？

人生は出会いと別れのくり返し……？

「人生とは、出会いと別れのくり返しである」と誰かが言っているのかどうか知らないが、「出会いと別れのくり返し」というフレーズは、谷村新司をはじめとするいろいろな曲の歌詞によく使われている……？ 私も弁護士稼業をやって

いることもあって、既にこれまでに普通の人よりは多い出会いと別れをくり返してきたと思っているが、パトリックの場合は、私の数倍、数十倍の数奇な人生を歩んでいるうえ、家を飛び出した後は100%自由な生活(?)をしているから、ヤバイ出会いを含めて必然的に数多くの出会いに遭遇することに……。

パトリックの出会いとは多種多様……

少年時代の最初の出会いは暴走族のリーダー(リーアム・カニングム)だったが、この出会いによって社会からつまはじきにされた仲間たちの連帯感を実感するとともに、マリファナなどの現実的な楽しみの味も……。

おばさんの家から追い出されるように1人母親捜しの旅に出たパトリックの最初の出会いは、旅回りのバンド「ビリー・ハチェット&モホークス」のリードボーカルをしているビリー・ハチェット(ギャヴィン・フライデー)とのそれ。他のバンド仲間は何とも奇妙な目で2人を見ていたが、当の2人にとっては互いに何とも絶妙のパートナー……? あまりのブーイングにバンドを解雇されることになったパトリックだったが、ここではじめて、「安心できる家庭を持てた」(?)と大喜び。しかし、ここにも政治の陰が顔を出し、結局2人は別れることに……。

その後、母親を捜すべく1人ロンドンに渡ってからは、①公園でぬいぐるみを着てバイトをしているジョン＝ジョー・ケニー(ブレンダン・グリーンソン)との出会い、②道で客引きをしていたパトリックを車に乗せ、これを殺害しようとしたヘンな客(ブライアン・フェリー)との出会い(?),そして③マジシャンのバーティ(スティーヴン・レイ)との出会い等、実に多種多様な出会いが……。この映画の1つ1つの物語は非常に密度が濃いので、それをすべて紹介してはととても追いつかないため、その1つ1つの物語は是非映画館の中で……。

これらのくり返される出会いと別れの中、パトリックの母親捜しの旅と自分探しの旅は、果たしてどのような結末を迎えるのだろうか……?

アツと驚く大爆破が生み出したものは……?

2005年7月に起きたロンドン同時爆破テロ事件は、記憶に新しいところ。また、つい先日の8月10日には、ロンドンのヒースロー空港でテロ未遂事件が発覚し、

ロンドンはもちろん世界中が大騒ぎになった。この首謀者たちはアルカイダーらしいが、イギリスではアイルランドの独立闘争をめぐる爆弾テロ事件は昔から頻繁に起きている。ある日、パトリックがロンドンのクラブ（酒場）である軍人さんと出会い、機嫌よく踊っていたところ、突然轟音とともにスクリーンが真っ暗に。一瞬「エー」と思ったが、案の定このクラブは爆破されたわけだ。その直後、その内部は惨憺たる状況に……。

もちろん、パトリックは偶然その場に居合わせただけで被害者なのだが、ロンドンの警察は何とも横暴。犯人はアイルランド人と決めつけ、何とパトリックが逮捕されたうえ、自白を強要される状況に。私たちが刑事訴訟法を学んだ時、戦前の日本はドイツ法をお手本としたが、戦後は英米法をお手本としたため「デュープロセス」が基本とされていたはず……。ところが、ウォリス捜査官（イアン・ハート）とルートリッジ捜査官（ステイーヴン・ワディントン）は、パトリックに対して殴る蹴るの暴行を加えて自白を強要するという考えられない事態が……。ここで面白い(?)のが、そこで示すパトリックの対応。パトリックはIRAの信奉者でも何でもないが、警察官による厳しい尋問と暴力の中、彼は次第に自分だけの想像の世界の中へ……。こんな体験がパトリックに及ぼした影響は、心理学者なら誰でも是非研究の対象にしたいテーマのはず……？

緊張感いっぱいマジックミラーごしの対話は……？

パトリックが「覗き部屋」でストリッパーのような仕事に就くことができたのは、このウォリス捜査官のお世話によるもの。売春はもちろん違法だが、この程度の風俗営業(?)は合法らしく、ウォリス捜査官は人助けのために、そのような善行を行っているらしい……。パトリックは人生経験が豊富だし、空想の世界の中でさまざまな物語を創造しているから、エロティックな雰囲気の中で彼(いや今や彼女)が客に語りかける姿は、結構人気を呼んだらしい。

ある日、そんな覗き部屋の客として現れた男がパトリックに語り始めたのは、ある孤児の話。その話を聞く中、パトリックは男が自分の父親リーアム神父であることはすぐにわかったが、彼がここに来たのは自分の罪を息子に懺悔するとともに、母親の消息をパトリックに伝えるため。マジックミラーごしの実の父子の

対面という設定は実に面白いもので、このシーンがこの映画の1つのハイライトだから是非注目を……。

母親とのご対面は……？

パトリックは「覗き部屋」の仕事で結構お金を稼いでいたようで、母親を訪ねていくについては精一杯のおしゃれを。さて、そんな女ゴコロ(?)をあなたは理解できるかな……？ また、母子のご対面といっても、真正面から告白するようなものではない。子供の頃からの憧れの母親エイリーとはじめて会うについて、パトリックは一体どんな作戦で臨むのだろうか……？

彼女が電話局の市場調査員を装って家のあたりをうろついていると、そんな姿を見て声をかけてきた少年が、実はエイリーの息子。息子の言われるままに家の中に入っていったパトリックだったが、玄関で母親の顔を見るなり、パトリックはいきなり失神して倒れてしまったから大変。さてその後は……？

チャーリーもいばらの道を……

マジシャンのパーティの助手として働いていたパトリックを連れ出したのは、幼なじみのチャーリーだったが、彼女がロンドンにやって来たのも実はワケありだった。それは、身ごもった子供を墮ろすため。父親はもちろんアーウィンだが、チャーリーはそれをアーウィンに伝えていないとのこと。それは革命、革命とIRAの運動に走るばかりのアーウィンに絶望したため……？

パトリックはそんな彼女にやさしく、「私みたいな子供が生まれてきたら大変なことになるかも……」と声をかけ、中絶手術につき合うことになるが、そんな励ましの中で、チャーリーの心は次第に強くなり、結果的には180度の方針転換を……。「子供を墮ろすことはよくないワ」などとわかりきったお説教をするよりも、自然体でチャーリーに接し、チャーリーをいたわるパトリックの姿こそが、チャーリーを立ち直らせる原動力になったわけだ。そんなチャーリーは今、アイルランドのタイリーリンに戻り、リーアム神父の下で臨月を迎えていた……。

パトリックの居場所は……？

「私はあなたの息子だ」と名乗ることはしなかったものの、ロンドンで母親との「面会」を果たしたパトリックは、それだけで十分。やっと長い間の母親捜しの旅が実現したわけだ。そんなパトリックが帰る家は、今はリーアム神父の家。そしてリーアム神父も快くパトリックを迎え入れたため、パトリックはごく自然にリーアム神父(ファーザー)をお父さん(ファーザー)と呼ぶことに……。ここに、チャーリーを含めた奇妙ながらも幸せな共同生活が順調にスタートしたのだが……。

さらに大波瀾が……

あまり長々とストーリーを書くつもりはないのだが、パトリックの人生は波瀾に満ちているので、つい記しておかなければならないことがあれこれと……？

ここで問題は、タイリーリンのまちでは、ロンドンの覗き部屋帰りのパトリックの派手さがあまりにも目立ちすぎたこと。パトリックはわが道を生きているだけだし、リーアム神父も苦難の末にやっと辿りついた心の平穏の中で生きているだけなのだが、伝統的で保守的なアイルランドのタイリーリンのまちの人たちの目には、チャーリーを含めたこんな奇妙な「家族」は目立ちすぎ、眉をひそめる対象となったのはある意味当然……。

それはそれで仕方ないとしても、その後の行動がいただけない。寝ている間にガラスを割って、リーアム神父の家に投げ込まれたのは何と発火物。燃え広がる火の手の中、命からがら逃げ出すことはできたものの、家は全焼してしまうことに……。さて、3人はこれからどうするの……？

大団円はロンドンで……

この映画の冒頭は、パトリックが赤ちゃんを乗せた乳母車を押しながら歩いているシーンだったが、ラストになってやっとその意味がわかる。その舞台はロンドン。そして、その子供はチャーリーの子供。つまり、ロンドンで、パトリックとチャーリーは生まれたばかりの子供を中心にしながら、奇妙な(?) 2人の生活を営んでいるわけだ。アーウィンIRAの革命闘争の犠牲になってしまったが、も

ともとチャーリーはパトリックが好きだったのだから、結局これが理想型……？

今日はチャーリーの定期検診の日。そこで、チャーリーとパトリックは病院へ。そんな時、乳母車とともにチャーリーを待っているパトリックを見つけたのが、あの日の少年、つまりパトリックの母親エイリーの息子だ。息子の話によれば、妊娠中のお母さんが、今病院に検診に来ているとのこと。病院から出てきた母親エイリーの姿を遠くから見たパトリックは、今度はそれだけで十分。パトリックの母親捜しの旅は今やっと終わったのだった。めでたし、めでたし……。

君はミッチー・ゲイナーを知っているか？

パトリックが夢の中で描いた美しい母親像はミッチー・ゲイナー。と言われても、今ドキの多くの日本人は彼女の名前や顔を知らないのでは……？ 彼女は1931年生まれの子役だから私も全く知らなかったが、私はミュージカル映画が大好きだったため、高校生の時に観たミュージカル映画『南太平洋』（58年）で、このミッチー・ゲイナーが水着姿で歌い踊る姿を今でも鮮明に覚えている。『南太平洋』といえば、『魅惑の宵』や『バリ・ハイ』の曲が有名だが、前者はオッサンの渋い声、そして後者はヘンな年寄りのおばさんが歌う曲だったから、高校生の男の子にとっては健康的なエロティシズムに溢れるミッチー・ゲイナーが歌う『ワンダフル・ガイ』の方が印象強かったのは当然……。

君は『慕情』を知っているか？

また、ジェニファー・ジョーンズとウィリアム・ホールデンが共演した『慕情』（55年）は映画としても有名だが、何と云っても「Love Is a Many Splendored Thing」の主題歌がカッコ良く、今でもカラオケ合戦の英語バージョンになると私が必ず歌う曲。その他、この映画の中には、あの曲、この曲の名曲がいっぱい。もちろん、私が知らない曲もたくさんあるが、音楽好きの人は、その方面の興味だけでもこれは必見の映画……。

プルートとは？

2006年8月17日の朝刊各紙は、一斉に太陽系の惑星がこれまでの9個から12個

に増える可能性が出てきたことを報じた。これはチェコのプラハで開催中の国際天文学連合（IAU）総会で16日、新たな惑星の定義の原案が示されたため。そして、新定義が承認されれば、①火星と木星の間に位置する最大の小惑星「セレス」、②冥王星の衛星とみなされてきた「カロン」、③昨年夏に米航空宇宙局（NASA）が「第10惑星」と発表した「2003UB313」が新たに惑星の仲間入りをするというわけだ。なぜ、ここでこんな場違いなニュースを書いたかという、この映画のタイトルである「プルート」とは、1930年に発見された9番目の惑星「冥王星」のことだから……。地球から順番に惑星をめぐっていき、「冥王星で朝食を」とは、何とも雄大で美しい発想……。もっとも、パトリックの人生は実に波瀾万丈に満ちたもので、最後に「冥王星で朝食を」を食べられる幸せをつかむことができたのは奇蹟に近いもの。そんな充実感いっぱいの「オカマ物語」には人生の教訓がいっぱい……。

どうしても追記の必要が……

以上の原稿を8月21日に書き終え校正してもらっていたところ、太陽系惑星論議について国際天文学連合は、上記の評論時から一転して8個にするとの修正案で最終調整に入ったとのニュースが、「冥王星格下げ!?!」との見出しで8月23日の夕刊各紙で報じられた。そして、遂に8月25日付朝刊各紙は一斉に、国際天文学連合は冥王星を惑星から除外し、太陽系11個案を否決し、8個案を決議したことを報じた。これは、新たに採択された惑星の定義は、①太陽を周回し、②自分の重力で固まって球状をしている、③その天体が軌道周辺で圧倒的に大きい、とされたところ、冥王星は③の条件を満たさないため。これによって、冥王星は長年親しんできた惑星でなくなり、新たに設定された「矮小惑星」に格下げされることになる。

国際天文学連合の議論がこのように「迷走」したことについてはさまざまな評価があるが、冥王星がこのように格下げされたことによって、万が一にもこの『プルートで朝食を』の評価が一緒に格下げされることのないようにしてもらいたいもの……？

2006（平成18）年8月25日記